

## 博報財団 第13回「博報日本研究フェローシップ」成果報告書

## I. 研究成果概要

氏名(フリガナ)	都 基 弘(ト キ ホン)
在住国名	韓国
所属・役職	韓南大学校・非常勤講師
招聘回(招聘研究期間)	第13回 (2018年9月1日 ~ 2019年8月31日)
受入機関	早稲田大学
招聘研究テーマ	室町時代の食文化における匙の基礎的研究—有職故実・料理の記録を中心に—
研究目的	室町時代の有職故実・料理の記録を中心に匙の使用例と、料理の品々を整理し、室町時代の匙の文化史への基礎を構築すること。
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか(具体的に)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・受入機関の早稲田大学において、Japanknowledgelib(有料)をはじめ、インターネットに公開されている有職故実・料理の記録を中心に匙の使用例の検索・収集・分類</li> <li>・早稲田大学図書館を通して、先行研究や有職故実書・料理書に関する資料と書籍の取り寄せ</li> <li>・慶應義塾大学図書館及び宮内庁書陵部図書寮などでの史料の調査</li> <li>・学会での口頭発表及び論文投稿</li> </ul>	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか(具体的に)</p> <p>『日中行事』(1334—1336年)『建武年中行事』(1352年)のような宮廷の有職故実書、そして『大饗記』(1432年か)をはじめとする武家の有職故実書において、匙の異表記である「七・ヒ」、「かい」という表記を確認することができた。先行研究においては、貴族社会の崩壊と匙は忘れ去られてしまったと言われている。しかし、武家の有職故実が整った時期であると言われている室町時代の有職故実書に書き留められていることからすると、少なくとも儀礼の世界では忘れ去られることなく、平安時代の伝統が受け継がれていたと言えよう。</p> <p>他方、室町時代の料理書と御成記の献立においては、匙の用例を見つけることができなかった。室町時代は日本料理の変革期であると言われているだけに、その理由について考えていかなければいけないという、さらなる課題を確認することができた。</p> <p>なお、「どのように食べていたか」という食べ方に関する記述を確認することができた。平安時代の有職故実書においては、「漬ける」という動詞が用いられていたが、室町時代の料理書においては、「かける」と「吸う」という動詞が見え始めている。平安時代の有職故実書においては、飯を汁に漬けていたが、室町時代の料理書においては飯に汁をかけていたということである。匙は飯を汁に漬ける際に用いられていたが、汁をかけることになったので用いられなくなったかもしれない。仮説の段階であるが、室町時代の料理書において匙が見えなくなることを解明すべく、さらに「食礼」の書物を中心に用例を集めていく必要がある。</p> <p>さらに、鎌倉時代から江戸時代にかけて、匙の材質と寸法と形態に関する記述を確認することができた。先行研究において匙の材質については、『延喜式』(905年)と正倉院とにおける「銀の匙」と「佐波理の匙」のことが取り上げられてきた。しかし、『西宮記』(982年前後)、『江家次第』(1111年前後)、『古器考』(1749年)などには、材質としては「白木(柳)」、寸法としては「一尺余許」、形態としては「小形」で「杓子」と「飯ヒ」と似ていることが書き記されており、日本における匙文化が鎌倉時代をはじめ、江戸時代まで続いていた可能性が高いということを証明できる資料を集めることができたのである。</p>	
<p>3. 研究成果</p> <p>○論文(題目, 掲載誌, 発行者, 掲載月, 内容の概略(200字以内))</p>	

・『類聚雜要抄』に見る匙の文化に関する研究－食具としての匙を中心に－』『日本文化学報』韓国日本文化学会、2019年5月31日

『類聚雜要抄』は文字の記録とともに線画による指図が入っており、大饗における献立・宴席の配置・調度の具体像を知ることができる平安時代の有職故実書である。本稿では平安時代の匙の文化を捉えるべく、『類聚雜要抄』における「匙」の記述に注目し、匙の「使い方」、「使い手」、「形態・寸法・材質」のことを明らかにした。特に、「匙の形態・寸法・材質」は、『類聚雜要抄』前後の有職故実書における匙のことを考える上で、貴重な手掛かりになると思われる。

・鎌倉後期の匙文化に関する研究－『厨事類記』を中心に－』『日本語文学』韓国日本語文学会、2019年6月30日

本稿は『厨事類記』に記述された鎌倉時代の宮中におけるお膳の指図をはじめ、食事・食器や匙などの記述を通してみる鎌倉後期の匙文化を考察したものである。宮廷の匙における材質(銀・木)と役割、木(柳)の匙が平安時代の伝統を受け継いでいることを明らかにした。なお、平安時代の『類聚雜要抄』の匙との比較を通じて、柄の長さ、面の広さ、柄の形態に変化があったことを明らかにしたのである。

○口頭発表(題目, イベントの名称, 日・場所, 内容の概略(200字以内))

・鎌倉時代の匙の文化史に関する一考察－『厨事類記』を中心に－』日本比較文化学会第41回全国大会 2019年度国際学術大会、2019年5月18日、同志社大学

先行研究において匙は「貴族社会の崩壊とともに匙は忘れ去られてしまい」と言われている。しかし、鎌倉時代の成立と言われている『厨事類記』(1295年頃)には、匙の図をはじめ、配膳図における匙の記載、匙の寸法などが書き記されており、このような『厨事類記』における「匙」の記録を検討し、「鎌倉時代の匙の文化史」の一端を提示しようとしたものである。

○その他の活動

・早稲田大学「古注の会」への参加

4. 今後の活動予定

・韓国日本文化学会 2019 年度秋季国際学術大会での口頭発表

「室町時代の大饗における匙の文化－有職故実書を中心に－」(仮題)

・韓国日本語文学会 2019 年度秋季国際学術大会での口頭発表

「鎌倉時代の匙の文化－絵巻を中心に－」(仮題)